

コメント

Comments

太田 清澄

過日、大國先生から今日のシンポジウムの枠組みをあまり詳しく聞かないまま、要請に従って、コメンテーターをお引き受けしてしまったという経緯もあり、果たして的確なコメントが出来るか否か心配しております。本日のシンポジウムの狙いとしている所から、焦点をずらしてしまいましたらご容赦願いたいと思っております。

私からの総括的なコメントが、この後の全体討議の時に、少しでも役に立てれば幸甚です。

では、レポートをいただいた順番に時系列的に、飽くまでも私の主観に沿ったものとなりますが、コメントをさせていただきます。

まずは、大國先生の発言に対するコメントです。これまでもあらゆる場面で、常に言われ続けていたことですが、ここで改めて大学の役割として教育の重要性を指摘すると同時に、これに加えて地域貢献と地域連携のことについても言及されました。厳密には別な表現で話されたと思うのですが、私はこれを地域貢献・地域連携という事を示しているものとして、受け止めさせて戴きました。結論から言うと、これが今日のシンポジウムの基本軸となるテーマであると位置づけさせて戴きました。「社会調査の成果が地域にどのように、あるいはどのくらい寄与していけるのか」という投げ掛けがされましたが、これはまさに大学の地域連携、地域貢献の重要性を示唆

したものと捉えています。先ほどの山本先生の表現を借りれば、「まさに地域の知の拠点となるべき事が大学に求められている」ということであると思います。この場合の知の拠点の知とは、地域の「地」と同時に、知恵の「知」を包含したものとして定義づけられているのだと思います。

繰り返しになりますが、大学の基本的な役割には、教育、研究そして三つ目として地域貢献・連携があるとされています。先ほどのレポートの中で、「学生に対して、この社会調査を通して、学生のスキルアップ、またはキャリアデザインのために、どうやってフィードバックしていくかが課題であると考えている」という問題提起がありました。私のなかでは、この課題解決に資する明快なシステムの理論を構築することが、研究の分野だと認識しています。

私の専門としている分野は、都市計画・都市地域開発等のいわゆる「まちづくり」といわれている分野ですので、元々日々の活動は、大学の3つの役割からすると、特に地域貢献・連携の所に重きを置いていると言えるのだと思います。今日大学に強く求められていますが、これは山本先生もかなり強調をされましたが、この地域貢献・連携という事に対する対応を一つの切り口として、今日のシンポジウムにおいて活発な議論を展開して戴き、最後には「意識の共有化」といった方向が、皆さんの中で合意形成されて行く事になっていけば、幸甚です。

太田 Kiyozumi 札幌学院大学名誉教授

(2016年3月退職)

お付き合いいただいた先生方はよくご存知かと思いますが、私の場合、地域プロジェクト、所謂「まちづくり」を推し進めていく場合、経験則から来る本能的な思考をベースに、進めている事が多いのだと思っています。私が主に講義を担当してきたのは、大学院の地域社会マネジメント研究科ですが、この研究科は社会人が非常に多いわけです。まさに百戦錬磨の社会人が多く集まっています。

その中で、私は最初からずっとそういう姿勢で教育をして来たと思っていますのは、「実践と理論」の重要性を認識させる事でした。いわゆる「まちづくり」にあっては「実践」ということが、非常に重要だと言われていますが、実践を進めていけば進めていくほど、現場は様々な利権やら人間関係が輻輳していて、まさにぐちゃぐちゃ状態になっていきますので、やはりこの時に必須となるものは、基本的な、ふれない「理論」です。実践が大事だというのは良く言われることですが、実践と同時に理論の構築ということが絶対不可欠だということです。後でもう一度触れさせていただきますが、山本先生の方から、私はこの言葉をしっかり認識していなくて、浅学非才を恥じていたところですが、大学の役割として「ロマン主義」と「功利主義」という話がありました。これは、私の考える「実践と理論」のところにやや近いという認識を致しました。やはり大学は「功利主義」だけではなく、「ロマン主義」も絶対に捨ててはいけませんし、先ほど、ロマン主義と功利主義は対立をしているようなお話でしたが、結論から言えば、ロマン主義と功利主義の「融合」というものを希求していくことが必要なのではないかと、いうふうに私のなかでは整理をさせていただきました。

ここで、ステークホルダーの支持という視点で少し話をしたいと思います。

ここにおいで、一部の先生には既にお聞きいただいたのですが、先般「キャンパスを

考える集い」というところで、客観的な立場からコメントをして欲しいという要望を受け、私論ということで話をさせていただきました。その折にも、大学が持続する為の重要な要素として、「ステークホルダーの支持」を指摘しました。合わせて、そのステークホルダーの支持を受けやすい一番明快な形というのは、地域貢献・連携という形ではないかという持論を披瀝しました。繰り返しになりますが、先ほどから、大学の役割として教育、研究、地域貢献・連携があることを述べてきました。対象とする地域に対して、「うちの大学は、おたくの地域に対して、こういう地域貢献・連携が出来ます」と発信するということですが、非常に重要ではないかという話をさせていただきました。

それから、現在、私は「大麻団地再生に関わる委員会」の委員長を務めていますが、先日11月18日に最終委員会を開催しました。4年間の積み上げの成果として、一般社団法人「まちづくり」組織を大麻地区に立ち上げるということについて了解を取り付けました。まちづくりの組織には、任意団体、NPO、株式会社、一般社団法人等があります。一般社団法人を選んだのは、公益性があること、利益を必ずあげて事業を動かしていくものであること、株式会社などと比べて非常に立ち上げ易いということがありました。ここで一般社団法人の構成員は、市民と企業と行政を予定していますが、一般社団法人の立ち上げが具体的に変わった背景には、私たちを含めて学識経験者たちがそこにいる、という信頼性が大きく寄与したと思っています。要するに大学関係者が関わっているというのが、地域を動かしていくうえで、絶対不可欠だということを再認識いたしました。そのことも通して、繰り返しの繰り返しですが、大学のもっている機能をやはり、社会に明確に、強くアピールしていくことによって、地域も私どもの大学も必ず光って残っていく、という本日の

テーマのところにつながるのだと思っており
ます。委員会には北海道新聞の記者が入って
いましたので、翌日の地方版には、この内容
が掲載されていました。このような発信力の
手段も活用していくことが、重要だと常に感
じています。

それでは、引き続きレポート戴いた各先生
方のお話の中から、私の価値観に偏るかもし
れませんが、私なりに整理をさせていただきました
キーワード、提示された課題等について
コメントさせて戴きたいと思います。私の
コメントをベースに、この後の全体討論につ
ながっていただければありがたいと思います。

山本先生のレポートに対するコメントで
す。一つは先ほどの「ロマン主義」と「功利
主義」という指摘に対してのコメントです。
両者には、これまでも対立があり、しばし
ばそれを繰り返すという話をされていまし
たが、私のなかでもこれは出来るのではない
かと思っているところなのですが、「ロマン主
義」と「功利主義」は、ここの時点ではやは
り「融合」した新しい形というものを、一
度は是非とも創りあげていっていただきたい
と思っています。

それから、もう一つは、実践されている
PBLについてです。Project Based Learning
からそのコンセプトを包含したうえで、
CBL, Community Based Learning という
ところに移行しつつあるのだということ
でした。

まさに、Community Based Learning の
コミュニティは地域ですから、地域貢献・連
携を意識した動きではないかと捉えさせて
戴いています。これについては、佐々木先生
のコメントと連携させて、後ほどもう一度
コメントしたいと思います。

佐々木先生のレポートに対するコメント
です。先ほど佐藤先生からも指摘とコメン
トがありました。[運動論]、[政策論]、[学
術論]、[教育論]という、4つの切り口
についての話

がありました。指摘がありました通り、残念
ながら、私どもの大学がスタートした時期
の学生の質と現在の学生の質とはだいぶ
変質していると思います。どのような状
況にあっても、大学にとって教育は絶対
に欠かせないものですが、まずどこに重
点をおくかという視点からすると、先ず
は政策論や学術論のところに重点化し、
この領域で一步、二歩と現状を踏み越
えて行った時に、教育論の話もついて
きてくれると考えることも、一つの方
向ではないかと思っています。ですから、
政策論、学術論のところに集中して、
地域課題を解決に導く多様な政策論・
学術論を重層的に抱え込む統合的なチ
ームを学内に作って、地域の活性化に
これを資していくという事が出来るの
ではないかと思っています。「うちなら
(札幌学院大学なら)出来る。」と宣言
することが出来る必要があるのではな
いでしょうか。このことに関連して
いくのだと思いますが、佐々木先生
からは「窓口の一本化」というキー
ワードが出ました。佐々木先生が言
及しなければ、私が言及させていただ
こうかなと話の途中で思っていた
ところでした。

最近ラグビーが大変な人気になりました
が、元々私は熱狂的なラグビーファン
で、ニュージーランドのオールブラ
ックスの本拠地にも行くほどの、熱
狂的なファンを自認しています。要
するにラグビーの15人のようなチ
ームを作る必要があると思います。
私は、これまでも本能的経験則で動
いてきましたが、最近になって高田
先生には、「私と組まないか」と耳
元で随分と囁いています。高田先
生が得意とする領域は、特に私の
最も不得意なところなので、私が
本能的に動いている部分をフォー
ローしてくれるには、そういう構
造があるので組まないかという話
を耳元で囁いたのですが、高田先
生が覚えておられるかどうかは
わかりません。「まちづくり」は
多様ですから、多様な専門領域
のメンバーにより、チームを
組む必要があると思っています。
逆に見

れば、本学にはこれだけのメンバーが居るわけですから、要するに必要となる15人のチームが組めます。先ほどの山本先生の最後の話に立ち戻りますと、Community Based Learningの展開にあっては、教育は後からついてくるという一つの割り切りもあるのではないかと感じました。「コミュニティをベースにして学生の教育を実践している」としながらも、具体的な地域において、CBLを本学の地域連携の旗印にして、立ち上げられた学内15人のチームが入りこみ、この地域の総合デザインを創造していくことになります。まずは、確実にどこか一箇所、二箇所の地域で、閉ざされている殻を本当に突き破って行く必要があるのではないかというふうに思いました。

木戸先生のレポートに対するコメントです。まずは「質的調査法」ということで、「参与観察」や「半構造化面接法」の話をあらためて説明いただき、私自身、認識を新たにしました所です。次いで、私の聞き取りが間違いなかったと思うのですが、もし、間違っていたら指摘いただきたいと思えます。木戸先生は「2009年以降、社会調査実習の形が本質的に変わってきたのではないか。」というお話をされたと思えます。要するに柔らかなテーマ、具体的には北海道のまちづくり的なものにチェンジしたと位置づけている。「まちづくり」というと、結構緩くてなんでもありなので、まさに「柔らかく」なると認識されてきたのだらうと思えます。それは、私の理解のなかで解釈すると、その背景には、学生の質も随分変わってきたという事があるのだと言及されていたように感じました。社会が変わったということのもあるのですが、それ以上に学生サイドの質が変革したと捉えています。その様な状況を踏まえると、木戸先生のなかでは、社会調査実習を実施するに当たっては、まずは自分がそのフィールドを調査させてくれ、というところから対象とする

地域に入っていかなければ展開が図れないと感じていたという話をされていました。再三の繰り返しとなりますが、大学の役割としての教育は極めて大事なのですが、教育以外のターゲット、研究と地域貢献・連携に絞って、まずは学内に連合チームを作って、対応していくところに大きな意味も価値もあるのではないかというふうに改めて受けとめさせてもらいました。木戸先生が試みようとしている姿勢は、本学が目指す一つの方向として、期待をしておるところでございます。

最後に高田先生のレポートに対するコメントです。高田先生が専門とする領域は、私の苦手な部分なので、今日の内容については大体理解出来たのですが、本質的なことは理解が出来ていないかも知れません。「アンケート集計のなかで、江別市については、回収率は非常に高くなっている、それは言いかえれば大学への信頼性の証左だと理解している」という話がありました。本学の相対的位置が弱くなってはいるが、まだまだ、強いものを持っているのだと思います。だとすれば、江別だけに限らず、大学の信頼性がこれだけ高いうち、時機を逃さないうちに、「社会調査」という切り口にするのか、あるいは「社会と情報」という切り口にするのか、あるいは今日集まったメンバーで、いずれにしても一つのチーム、ラグビーで言えばオールブラックスチームを作って、ことに当たっていくが求められているのではないかと考えられます。大学にとって教育は非常に重要だということは重々承知の上で、更に踏み込んで言えば、教育の前に、先ほどの佐々木先生や山本先生のコメントを借りれば、「政策論、学術論」あるいは「学生のフィードバックのところ（教育領域）には明快なシステム理論の言及が不可欠である（研究領域）」という視点に戦略を絞って、一回オールSGUで勝負をかけてみる時期にあるのではないかというふうに改めて思った次第です。ちょうど私に割り当てら

れました15分になりました。独断的な総括となりましたが、次の全体討議のなかで、これも材料に議論を深めていただければ幸甚です。よろしくお願いいたします。

全体討議

大國：太田先生、ありがとうございました。
(拍手)全体討議をおこないたいと思います。4人の先生方、そして太田先生のコメントを含めて、どこでも構いませんし、全体に関わることでも構いませんので、ご意見、ご質問等をお願いします。

森田：佐々木先生が言われた、どこかの地域の地域貢献に強い、貢献している大学ということで、太田先生も仰っていたように窓口を作って、一本化してそれに応えるような体制というか、仕組みがあってはどうか、というご提案だったと思います。それがすごく印象に残ったものですから、それはどういうふうにするのが一番良いのか、と考えていました。単純に考えると、仮に何らかの窓口があったとして、ある地域から…の調査をして欲しい、あるいは活性化やまちづくりのために何か考えて欲しい、というような問い合わせがあった場合、そこがそれらを集約して、学内の適当な担当教員あるいはグループにそれらを割り振るといようなイメージが思い浮かびます。しかし、地域調査を行っている各教員の方はそれぞれの問題意識を持って取り組んでおられますから、そういう単純な作業割り当てには対応困難で、そうすると求めているのはそういう窓口とは違うかなと、感じています。

一方、山本先生のお話で、(失礼ながら私は今まであまり知らなかったのですが) ああいうふうに地域と結びつく

形で学生教育の実践と同時に、地域貢献としての成果を上げておりましたその要請も着実に増えてきている。その方向をさらに展開していくためには、外から見て問い合わせの窓口があって、そこを通じて問合せや要請が何らかの形で反映される、受け入れられるというのは、やはり必要なことだと思うのですよね。その点に関して、先ほどの太田先生の(研究者としてのチームという)話を聞いて思ったのですが、事務的に窓口があって、そこに来た要請をうまく具合に割り振って、ということに主体があるのではなくて、やはり担当をしている研究者としての教員集団の研究会というのでしょうか、研究者の集まりとして連携をもっと強くする、ということが重要なのでしょうか。外部とのつながりを個々の教員がばらばらに持つのではなく、調査を担当している人の研究者集団として、外部からの要請をどのように受けとめて行くかを研究会で考えるという仕組みを作った方が良いということなのでしょうか。言葉が思い浮かばないので便宜的に研究会と言いましたが…。

その点、私自身に何らかのアイデアがある訳ではなく、今のはちょっとした感想のようなものなので、佐々木先生の考えをお伺いできたらと思います。

佐々木：ありがとうございます。私は今回の報告で最後に地域貢献を前進させるといことで、体制づくりと窓口の一本化と言った理由は、本学に学外からの依頼を受ける窓口があるようでないと感じたからです。実は、音更町での2年間の調査期間に、大学との連携をもっと深めたいという話を頂いておりました。しかし、それを僕が受け取っ

て、大学のどこに言えば良いのかが分かりませんでした。経済学部長にも相談して、佐々木先生の方で進めてくれたらいいですよ、という話だったのですが、僕が進めるって何を進めるといいのだろうか、ということがありました。もう一つは、音更町から私だけではなく、札幌学院大学にはいろいろな先生がいるでしょうから、いろいろな切り口でうちの町を調査して欲しいという話もあったので窓口があると物事をスムーズに進めやすいと思ったからです。

音更町は人口が45,000人くらいの町でありまして、近年まで増加傾向にあったのですが、地域経済の問題ということで言えばコミュニティの混住化が相当進んでいることがあります。音更というのは、元々農村地帯の北部と住宅地が広がる南部でそれぞれ特徴が異なっています。特に、南部にニューカマーの方たちの住宅地が拡大しています。町民の意識も南部と北部、南部の中でも違いが見られるので、町民が集まって賑わいを作る場所を作るためにはどうしたらよいかという問題も町政の課題となっています。そういうことも含めて基礎的な調査ができればいいな、という話も出ていました。私としては、本学が持っている研究資源などを音更の方で活用していただければ、こちらとしても研究もできるし町にも貢献できることになりますねと答えてきたのですが、まずは本学に窓口をどこかに作ることが出来れば、いろいろな先生にも情報を提供できるのでは考えたのです。

やはり地域貢献、地域連携という点で考えれば、窓口を一本化してこちら側からはいろいろなメニューが提示出

来る、という点が一つ重要になってきているのではないかと考えて、最後に問題提起させていただきました。ですから、具体的に研究会ということではなくて、むしろ、各自治体に提示出来る研究教育資源メニューみたいなものを一本化出来れば、もう少し効率的になるのかなというふうに思った次第です。

森田：各担当者がばらばらに個人の責任でやるのではなくて、大学としてこんなことができますよと、まとめて出せるような仕組みということですね。

大國：先ほどの太田先生のコメントでも中心的なお話の一つだったかと思えますけれど、この点に関しましてどなたか、ご意見はありませんか。

山本：今の佐々木先生の「メニューが提示できるということを示す」とこと関わってきますが、松本大学に昨年、人文科学部の内田先生がヒアリング調査に行くということで、そこに学部長命で情報を得てこいということで私も同行させてもらったのですが、非常にいい勉強になりました。松本大学には「夢工房」という名の地域連携の事業を展開する部署があります。そこでいろいろなプロジェクトを展開していて、地域連携事業は松本大学では大学全体でやっていてCOC (center of community) という点で注目を浴びている大学です。全国から視察が絶えないという状況なのですが、その「夢工房」というのを立ち上げて、いわゆるプロジェクトベースの教育事業を展開しています。

こういうプロジェクトをやっていますとか、街づくりでこういうことを連携してやっていますとか、商店街ではこういうことをやっていますとか、あるいは福祉関係でこんなことをやって

いますと活動の様々なメニューをあげていて、そのパンフレットがあって地域の人がそれを見て大学と何かできないかということであるそうです。ですから、研究者ベースで研究者が集まって何か一緒にやりましょうと言っても、やはりそれぞれの研究があるし、私の場合はほとんどもう研究から離れてしまって、あくまでも学生の教育をということであることができるのかと考えている部分もあるので、研究者ベースでやるよりは、そういうプロジェクトベースでこういうことはできます、調査研究もこういう研究だったらできますというメニューを出して、そこに外部の人がアクセスしてくるようになるのと良いのではと思いました。

また、実際に松本大学はものすごくいろいろなことをやっていて「すごいな」と思うのですが、一つ一つの活動を見ると本学でいろいろな先生がやっていることとそれほど変わらないのですね。本学では、私はよく知りませんが、例えば人文学部では新田先生が高齢者福祉ということで大麻の町内で「老人の居場所づくり」みたいなことをやっているという話を聞きますが、松本大学でもそのようなことをやっています。だから、松本大学はすごいというのですが、今日の報告を聞いていてもそうですが、本学でもいろいろな先生が一つ一つやっていることを集めるとそれほど遜色ないことをやっているわけです。その意味では本学は地域連携が進んでいる大学であると打ち出していくことは可能だと思います。

もう一つ言えば、その「夢工房」は今では学生が中心になって運営をしているとのこと。1、2年生でそういうプロジェクトを経験した学生が、

3、4年生になってその「夢工房」を運営して、次の1、2年生を教えていくという体制ができているので、そうなる学生が主体的な活動として様々なプロジェクトを地域と連携しながら実施し、そこに教員が加わってサポートをするという形ができ、地域がその情報を得れば、そこにアクセスしてくるということが可能になるのかなと思います。ですから、そういうやり方がよいのではないのかと思います。松本大学の事例の紹介でした。

平澤：以前、教授会でも話をしましたが、現状をいうと江別市から安倍内閣の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」の関係で話が出ています。太田先生にもお伝えをしていますが、その関連で学長には随分前から地域連携の窓口を作ってくれと。ただ、地域連携の窓口がどういうふうになるのか問題はありますが、一応学長にも要請をしているという形で考えている、というところ。です。

太田：一点、コメンテーターの立場として、発言をさせていただきたいと思います。今、平澤先生から話のあった「江別市まち・ひと・しごと創生総合戦略」の経緯について、もう少し正確にお伝えしておきたいと思います。私の個人的な話になりますが、私はこれまで江別市に関わる様々な活動をしてきました。具体的には「大麻団地再生計画委員会・委員長」、「江別市経済審議会・会長」等々です。このこともあって、市長が私に「まち・ひと・しごと」の事業について、私に個人的に様々な相談がありました。その折に、私からは「私個人ではなく、この件に関しては大学全体として受ける用意があるし、それだけの人材がいますから、まず学長

に話をして、組織づくりを要請して下さい。」とお話をした経緯があります。このことも含めて、話の繰り返しになりますが、本学にはこれだけの人材がいながら、先ほども言ったように、ばらばらな状態にいるのは非常にもったいないと、かねてから思っています。

「江別市のまち・ひと・しごと、地方創生事業」については、そういう経緯がありましたから、大学として本当に対応をしていくべき問題だと考えています。内部の人材を、十分に活用すべきです。

小内：その、「メニューを提示する」といった場合に、松本大学がどうやっているのか、ということをお聞きしたいのですが、たくさん来すぎてしまう、ということもありますよね。それはどうするのか、ということと、あと「夢工房」で学生が何を担っているのか、ということをお聞きしたいです。

山本：はい。たくさん来すぎるのではという問題については、確かにそういうことをおっしゃっていました。実際に有名になればなるほど、やはり来ます。何故、松本大学が成功したかという、松本は地域のミニコミ誌がすごく多い地域だそうです。それで、松本大学がいろいろと地域に出て活動をする、地元新聞やミニコミ誌が必ず取り上げて、記事を掲載するそうです。地域密着のミニコミ誌ですから多くの家庭が購読しているし、地域の企業も購読しています。ということでヒアリングした時の前年は、一年間で400数件の記事が掲載されたと言っていました。つまり、365日、毎日1件ないしは2件、どこかのミニコミ誌や地元新聞の地域欄に記事が出るというわけです。

記事が出ることで、地域住民も「じゃ

あ、松本大でいいんじゃない」と、わざわざ東京の大学に行かなくても地元で学生がこんなに頑張っているのだからとか、中小企業や地域の企業なども「こんなに頑張っているのなら松本大学の学生を採用しようか」とか、そういうようなことで定員も復活して地元出身の学生が集まるようになってさらに活動が活発になった、そして地元就職をするということをおっしゃいました。これは、質問の趣旨から少し外れましたが、そういうなかでやはり地域から期待されて、いろいろな依頼がくるようになったということで、松本大学の学長がおっしゃっていたのは単なるマンパワーの提供のような依頼も多いと、要するに「人手が足りないのでボランティアで来てくれないか、手伝ってくれないか」というような依頼もかなり多くて、そういうのは全部断っているとおっしゃっていました。本当に、そこで学生を教育してくれるのですか、あるいは学生がそこで学んで成長をするのですか、ということを見極めて、取捨選択するということをおっしゃっていました。

あともう一つ、具体的にどういう運営をしているのかという点については、そこまで聞いていませんし、十分に調べていませんのでわかりません。学生が運営主体ですから、本学のコラボレーションセンターみたいに、学生がその窓口にいて、こういうことしたいとかプロジェクトをやりたいとか、あるいは外から入ってきた要請をどうするのかということで、そういう運営をしているのであろうと推測しますが、すみません、具体的な詳細はわかりません。

小内：調査というよりは、全ていろいろな要望があるわけですね。そのボランティアなど、そういうことも含めて、聞いていて、確かにみんなで取り組めるといいなと思う反面、社会調査という時に、研究面と教育面と地域貢献の面があって、それを全て満たそうと思うと結構大変だし、取捨選択をしないと難しいところがありますね。私たちのようにある程度の年齢になると、もういいやこれはこれでやる、みたいな感じで割り切ってしまうのですが、特に、若い人たちが消耗しないでやっていくためにも、やはり研究面というのはすごく大事にしないといけないかな、というふうに思います。どうやっていくのがいいのか、その辺はなかなか難しいな、と思いながら聞いていました。

山本：今の小内先生のお考えに同感です。太田先生には申し訳ないのですが、要するに「ばらばらではいけないのですか？」ということなのです。ばらばらでいいのではないか、という考えもあると思います。それぞれの学部でそれぞれの教員が、それぞれの教育理念であったり教育手法を使ったりして、また自身の研究との関係もあるでしょうし、それで展開しているわけですから。私はばらばらな状態でやるというのはそれぞれの教員の個性を削がない、個性をグメにしないやり方でもあると思うのです。ただ、やはり大学として地域貢献活動を、これは功利主義的考え方ですが、関心を持ってもらって受験生が増えるようになっていくということと使うとすれば、それは「見せ方」の問題だと思います。ですから見せ方として、それぞれの学部でこんな面白いことをやっているし、こういうことをそれぞれがやっているということ

上手く見せていけば、大学としては地域といろいろな連携をしていることを表現できるわけで、そこが問題だろうと考えます。

その意味で、今日の私の資料がちょっと多すぎたのですが、しつこいぐらいに新聞の切り抜きも出していますが、これを何故出したのかということ、これは大学の広報の問題だということです。広報手段としてバルーンもいいし、テレビコマーシャルもいいのですが、あるいは地下歩行空間にかわいい女子学生の顔をアップにした壁面広告を出す、そういう広告の仕方もありだとは思いますが、もっと大事なことは多くの名も知れぬ一般学生が地域に出てどんなことを頑張っているのかとか、どんな活動をやって頑張っているのかということ、これをパブリシティで北海道内になるべく知らせていくことです。先ほどの松本大学のミニコミ誌や地元紙に記事が掲載されるということもそうですが、やはりそういう一般の学生がどんな勉強をして、どんなふうに頑張っていますかということ、それは調査報告書もそうですが、こういう調査を音更でやっていますとか置戸町でやっていますとか、そういうことが北海道新聞など地域誌に掲載されて、パブリシティとして情報が伝わっていけば、大学は地域でいろいろなことをやっているのだという評価が高まってくると思うのです。ですから、大学の広報戦略を考える時に TV コマーシャルもいいですが、やはりこういうところに力を入れて、教員がそのところを心配しなくてもいいように上手く、例えば広報課の職員が新聞記者とコミュニケーションをとって、この学部のこの先生が今度こういうこと

をするのでこれをちょっと記事にしてみらえないか、というようなことをもっとやっていくと、大学全体として地域とつながりが深い、様々な活動をやっている面白い大学だという評価が高まっていくのではないかと、そのように考えます。

大國：ありがとうございます。少し議論の整理をさせていただこうと思います。

佐々木先生から、四つの観点の指摘がありました。それを太田先生が、要は政策の側面、学術論の側面、ここにウェイトをおいて進行させていくというご提案をなさったわけです。ただ、いろいろなお話を他の方々から伺ってみると、おそらくそれがベースとして、そこがしっかりしていないと、何も売り物が無いということになってしまうので、確かにそこは重要なわけです。ところが同時に進行している、例えば教育のプロジェクトであるとか、あるいは地域に入っていくような問題、それもやはり現実には同時進行をするわけですが、おそらく考え方としてベースにその政策論、学術論を据えて、そのうえで運動論、教育論を仕上げていく、というのが先ほどの太田先生のコメントだったのかな、というふうに理解はしています。ですので、山本先生がばらばらでもいいですよ、という話はまた、それはその通りだなと僕も思いますし、逆に太田先生がオールブラックス的な強力なスクラムを組んで、15人とは限りませんがチームを作る、これもまたあって良いと思います。

今、なにが問題なのか、ですが、一つには、例えば佐々木先生のお話では、音更町の方からそう言われた時には、現実には困ってしまうよねという話で

すよね。佐々木先生お一人で対応が出来るものでもないし、窓口的にもそうだし、専門的にもそうだとすることが一方ではある。

木戸先生の置戸町の方が3年目の予定の3年目になっていく、その次はどうする、ということにもなります。自治体も自治体の政策に根差した要求が大学に向けられてきた時、というようなことが今、実は一番手薄なのだろうとは思いますが、調査だけでは何かができるわけではないですが、こういった事柄に関して、木戸先生はどのようにお考えでしょうか。

木戸：僕は、窓口の一本化のような話というのは、どういうものかはまた別なのですが、要は情報を集約して欲しい、ということは前からいろいろの人に言っていて、誰がどこで調査をしているとか、誰がどこを得意としているとかか、そういうことを集約してもらえると、ああ、そこへ行きたいなとかいうことが出来るので、そう意味ではなるべく、何と言いますか、北林先生もそうですが、他の方がどこに行かれているのかな、ということはお聞きするようにしているつもりなのです。

人文だと、別に社会学や福祉だけではなくて、臨床の先生なども結構地域に関わったりもするのです。だから、個別に話をしているなかで、じゃあ、今度連れて行って下さいみたいな話はよくあるのですが、それこそ、先ほどの音更の話のように、そんなに好意的に受け入れてくれるのなら一回行ってみたい、とか思うので外に出て、北海道をフィールドにしている研究者は結構たくさんいるはずで、いろいろな地域と接点があるはずだから、まずそこを集約して、さらにどういうふう

打ち出すか、というのはまた別な話ですが、内部でもっとそれにコミットしやすいような体制を作ってほしいな、と個人的は思っています。

今回は、社会情報のシンポジウムという括られ方なのだと思うのですが、こういう機会はなかなかないですし、他の先生方の報告等も聞けるので、得るところが多いかな、と思って、「はい」と即答をしましたが、なにか、そういう実際にばらばらでも良いと思うのですが、ばらばらに誰がどこで何をやっているのか、ということは知りたいと思うのは個人的にあります。

小内：自分たちも知らないのに、外の人のことを知るわけがないのでは。ああ、外の方の人は知っていることもあるのかな。

木戸：あとは、やはり置戸などは、鶴丸先生は地元ですごく有名なので、鶴丸先生が行くと何と言いますか、いろいろな人が集まって来るのですが、僕は後からひょいとして入ってって感じで、しかも、鶴丸先生が行かれている場所と違うところもあるのですが、滞在期間も短いですし、オケクラフトにしか関わっていないので、町に対して、関わり方としてはかなり貧弱なのです。なので、誰か何か来たい人がいれば、まあ、平澤先生や新田先生が関わってくださったりしていますが、もう少し複数の専門の立場から関わる事が出来れば、個々のばらばらの調査研究や実習もよりやりやすくなるのではないかな、という気がします。その辺、まずは誰がどこで何をやっているのか、というのを学内で共有することが必要だな、と思っています。

大國：ありがとうございます。誰がどこで何をやっているのか。(笑)

佐々木：先ほど、山本先生がおっしゃっていたように、私の報告の最後の方でも触れたように「広報」というのが、多分一つのキーワードになると思っています。しかも、「うちの大学って何をやっているのですか？」というのをどのように見せるのか、というところが非常に大事になっている気がしています。例えば音更町にも大谷短大が立地していますが、2年間のみでの在学で卒業です。それに対して本学は4年制の大学であり、長期的な付き合いができれば音更町にとってもある意味で「おいしい話」なのだと思います。ですので、そこに私たちがコミットして、学生を20人くらい連れて行くだけで、札幌学院大学で何かやっているぞと町に対するPRになるわけです。このように、学生を現地に連れて行くだけでも地元の新聞に取り上げられたり、町民に少しだけでも関心を寄せてもらったりすることにつながると思います。研究の体制として一本化というのは難しいにしても、本学の広報戦略という部分では、先ほど木戸先生がおっしゃられたように一本化は出来るはずだと、思うのですが、やはり難しいのでしょうか。

木戸：関連するのですが、例えば報告書などを出すじゃないですか。でも個々に管理しているのですよ。していますよね。今年は学内印刷になってしまったので、PDF版も作ったのです。これもどこかしかるべきところに置いてくれないかと相談に行ったのですが、学科のホームページから、リンクを貼ればよいのではないかと、みたいな感じなんです。そういう、たくさん成果物みたいなものというのも、大学のホームページにアクセスすると、どこかにい

けはずらっと見られるだとか、そういうふうにした方がいいような気がするのですが。

平澤：大学のリポジトリには入らないのですか？ 図書館のリポジトリには、前は担当の方から社会調査実習の報告書などをくださいと言ってリポジトリにした時もあるのですよね。

高田：学部紀要もリポジトリ入っていますから、技術的には出来るはずですね。PDF になっていれば、元々技術的に難しい話ではないように思いますし、すぐにでもできるような。

平澤：やろうと思えばできるもの、やるかやらないかの問題ではないですか。

高田：どのようにやるのかということ。

小内：ペーパーがあれば、ペーパーをそこに並んでいるところに、ペーパーがあれば、まずはそれをどこかに、コミュニティセンターだとか、そういうところに3年間分だけ置いておくだとか。意外に本当に、最近いろいろと声がかかってきて、法学部の家田さんなども、足寄から何か、海外の人の意見を聞かせてくれと言って、台湾から来た学生を連れて行くなどしているのですね。知らないところで、「えっ？」とか言って、地域のことを知らないから、今度関わって下さいと言われたのですが、うーんという感じなのですが、何かそういうのが結構あるので、そういう情報だけでも、本当に共有出来たらいいと思います。

大國：ありがとうございます。どの組織がいいのかということ、そろそろターゲットを選ぶのでしょうか。リポジトリを考えると、総合研究所でも扱えるのかなとは思いますが、学部を超えたところで情報集約をしたいという形になりますから、学部ベースでやっ

ていると、そこは見えてこない、勿論、学部ベースでそういったPDFで報告書をあげていてもいいのでしょけれども、そのサイトへのリンクで一括して誰がどこで、どんな調査をしているの、報告書はここですよ、みたいな一覧表があると、それはそれで使えますね。

平澤：私も今度、実は江別市の関わりをやっているのですが、やはり、今度、江別の企画は複数の市町村が入ってくるのですね。それでいろいろな要望も含めて、そうするとやはり本学でこの窓口に来て、その要望をどこで受け取るのか、ということが多分重要になってくるといふふうに思います。だから、さっき佐々木先生が言った、どこかで要望を受け入れるようなところが、やはり必要になってくるのかな、と気がします。もう一つは、私は置戸に行っていたのですが、一番困っているのは、やはり自分の能力的なものもあるし、例えば、木戸先生と一緒に半期やろうとしても、木戸先生の問題意識と私の問題意識はかなり違っています。そうになると、置戸という同じところに行っても、どうやって協力出来るのだ、というのがありますし、置戸町で言いますと、今は何が問題かと言うと、温泉施設を直なおしたい、と。これは、平澤先生、どうですか？と言われても、私はすごく困っちゃう。ですから、関係する先生に相談すればよかったかな、と今は思うのですが。やはり、要望にもなかなか応えられるものと応えられないものがある、能力的なものがうちの大学にある。

それから、さっき言ったように松本大学の話は知っていて、山本先生が行った時にいつか聞きたいと思ってい

るわけね。でも、意外とそういう機会がないのですよね。だから、今言った話も山本先生もこういう場があったから、初めて情報が流れてきてね。やはり、そういう情報を流す場がどこかに無いといけないのかな、というような気がします。

小内：内田さんは報告したと言っていましたよ。パワーポイントはあると言っていました。内田さんも松本大学のことをしょっちゅう言いますね。

平澤：本当にもしやるとしたら、もう少しちゃんとした部門を作らないとだめだと思います。要望もあげているのです。学長に何回も言っています。学長も作りたいと言っているのですが、事務がどう応えるのかという問題があります。

太田：二点コメントしておきたいことがあります。一点目は、先ほど山本先生から私には悪いけれど、と気遣いを戴いたうえでの発言がありました。私にとって少しも悪いというものではなく、目指しているのは同じ方向だと思えます。要するに、拘るようですが、例えに出しましたオールブラックスのことは、改めてプロジェクトチームを作れということではなくて、今までやってきたことの延長で良いのだと思えます。それぞれの個性を、徒に消してしまう事は避けるべきです、個性がないとそれはだめなのだと思います。見せ方の問題であるとの指摘もありましたが、その指摘もその通りなのだと思います。但しその見せ方には拘りたいということです。イコールなのかもしれませんが、私のなかでは「見せ方」とは、いかに強烈にアピールをするのかと言うことなのです。「本学にはこれだけのメンバーがいますよ。」そし

て、「こういうことも、こういうことも、こういうことも、みんな出来ますから、全体を眺めてこのまちをどうかしてくれと依頼されたら、総合的に対応が出来る大学ですよ。」と言い切れるものになりたい、すべきであるという話だと思うのです。決して、改めてプロジェクトチームを作る、ということではないのだ、と思っております。

二点目のコメントです。少し前の話になりますが、当時の布施学長が総合研究所の設立を試みました。総合研究所を強化させるために、松本伊智朗さんを所長に据えたいと言う発議がありました。確か8～9割方の人が反対をしたのですが、その中で、私は急先鋒賛成論者でした。「絶対に作るべきだ」と強く主張しました。その役割の一つとして、本日のシンポジウムで議論がされているように、全体をトータルの見る組織が不可欠であると考えたからです。例えば、「この案件については、こういうメンバーで組織を構成し、飽くまでも大学全体として発信していく。」といった、そういうマネジメントをすることが総合研究所の大きな役割になると思っていましたからです。

総合研究所の設立案については、強烈な応援演説を学長室でした拘りもありますから、やはり総合研究所がこの点において、十分に機能していくべきだという話は、重要な指摘だと思います。

大國：今日の主題のなかでも、全学的にいろいろな資産はたくさんある。しかし、それが相互にはわかっていないよねというのが、一番大きな課題になりうるだろうと。もし、それがわかっていたら、例えば佐々木先生のように音更町

から依頼をされた時に、あんな人とこんな人がいますよと、すぐに応えられることができます。また、この先いったいどういう形で「見せ方」というのを考えていくか、アピールをしていくか、といった時でも、要するに一件一件をあちこちで出すよりも、それぞれはばらばらにやっっているながらも、一連の札幌学院大学地域連携のシリーズの一つとして、今回これが一つ出てきたね、というふうに応えられることが、積み重ねの成果としてできるはずなので、そういった狙い方をしたいと思います。ある程度連携をとり始めてくると、学生に対する教育という面でも、いい効果が生まれてくるであろうと、学生さんにしてみれば、札幌学院大学って地域で出ているってという新聞記事、一度は見たことがあるよという子が増えてくるようになればいいなと思います。

そうすると、主体的な学びの一番コアにある動機づけの部分でも、今度これが自分のやることなのね、と思ってもらえます。多少、短絡的かもしれませんが、そのような方向性があると思います。

時間も無くなってきましたが、最後にどなたかお一方くらい、ご意見等をいただけましたらと思います。ついこの間まで浦河に行かれていた北林先生はいかがですか。

北林：地域研究と言っても、山本先生はずっとやっておられました。私は本当に自分の研究とは全く別なところで教育ということでやっています。お話を聞いていると、置戸にしても音更にしても北海道は広いよね、ということで、太田先生が言ったけれども、一つの拠点を使ってそこでやっていくと言って

も、北海道って広すぎるのでしょうね。長野県松本だったらそれほど広がりはないだろうけれど、行くだけでもすごく旅費がかかりますよね。時間もかかりますよね。置戸まで行くにしても音更に行くにしても、浦河に行くにしても相当な時間がかかるし、学生を連れて行くとなると、学生の負担もあるので、北海道の地理的なものの広さというのは、魅力でもあるのだけれど障害にもなっているよね、多分、距離があるというのは、だから、焦点を決めて行くというのは非常に難しいし、みなさんが今やられているのを続けていくというのは、一つの帰結なのだろうなというふうには感じています。

それから、もう一つは、確かにフィールド実践をやると学生は変わりますよね。だからやり続けているのだと思うのですが、僕のゼミなんて、どうしようもない学生が集まってくるのだけれども、「今回、浦河行きますよ」、「先生、浦河に何かあるんですか?」、「馬と、シャケと、昆布だ」と。はじめはそんなもんかなと思って、調査をする前に調べさせるのですが、おざなりな調べ方をしてくるのだけれど、行って帰ってくると目の色が変わるんだね、あれね、不思議なことに、行って帰ってきて一週間目で報告書をまとめるよ、と言うと、目の色が変わって、ああ、こいつらちょっと変わったな、というような実感があるので、それがこんなことを続けていける教員のモチベーションになっているのだろうなというふうに思っていて、教育という面でも非常に意味のある教育方法かな、いうふうに思っております。

それから、まとめていくにしても、佐々木先生や木戸先生が言っていまし

たが、一つにまとめていかなければいけない、その窓口を組織的に、それはもう近々の課題だろうな、と思っ
ているのですが、取りあえずでもいいから、この一年間、札幌学院大学で調査実習を
やりました、というものを全部、一年間まとめてそれを出していく、そして各教員に
配布するというのも、まあ、一つの手始めとしては、それくらいは出来るでしょう
って、いうふうには思いますよね。

小内：大学のホームページに載せてもらってもいいよね。総合研究所で。

北林：うん。この一年間、各学部のホームページには載っているのだけれど、そう
ではなくて、大学全体として今年度の調査実習をざっとね、書き上げてきて教員に
配るだけでも、大分情報の共有が出来るのではないか、という感じはするし、それ
ならすぐにも出来るのではないか、と思いますね。

それで、こういうのが小内先生、非常に大切ですので、これで終わりにしないで。
社会情報学部がこういう地域調査研究、地域教育の拠点として、これからもずっと。

小内：社会情報学部は来年から研究委員会がなくなるから、そう思って、今の体制
ではもう。

北林：研究部会は残らないのかい、あれは。

小内：それはどうするのかはこれからです。この形では最後だという意味で、言っ
たつもりです。

北林先生：社会情報学部のもっている研究部会を発展的に解消、発展的にやってい
くという。

小内：ああ、こういうものもやるという。

佐藤：私はね、社会情報学部がもうクローズという話があった時に、それは困ると、
社会情報の研究部会みたいなものは残

せと。そういう話をもう10年前に言っ
ています。

北林：だから、こういうものは拠点として、社会情報学部の研究部会を残していく
のも一つの手なのではないか、と思っ
ています。そこがおのずと情報をまと
めたり、そこに職員をつけたりしたら、
宣伝窓口になっていくわけだから、
せっかくあるものを使わない手はない
し、失くしてしまうのは惜しい、とは
思います。すみません、雑駁な。

大國：ありがとうございます。いろいろ、非常にテーマが多岐にわたりつつ、しか
し、ある種一つの方向性もあったかな、
と思います。それで、今、北林先生の方
からご指摘のありました、今年度のう
ちでやった調査実習のリストみたいな
ものは、わからないですが、一応、僕
は研究支援委員なので。

北林：社会情報学部の研究部会に全部集めたら
良いのでは。

大國：なにか、そういうシステムも作れると
思いますし、今度の総合研究所年報の
時にそういうものを書く欄を作って、
全教員に出してね、ということをやっ
ちゃおうということをやれるかもしれ
ないので、やってみようと思います。
あと、学部としては、そろそろ命運つ
きかけていますが研究部会として、総
合研究所に今、続いているものがあっ
て、こいつは学部と連動して消滅する
運命なのか、しかし、そうでもなくて
研究部会は研究部会として存続するの
かということがこれから議論になるの
だろうと思っていて、先ほどご指摘が
ありましたが、研究部会として残って
いく方向で僕は考えたいと思っていま
す。その時に、今、北林先生におっ
しゃっていただいたように、こうい
うふう学内の調査だとか、研究、教育

の両面に渡るものですが、そういったものに関する情報集約の場として、そこを使っていたらいいようなかっこいいものも、存続する根拠の一つにはなるとは思っていますので、そんなふうを考えようと思っております。

今日は学内の方に講師をお願いして、このような形でシンポジウムを開いたというのは初めての試みで、なかなか普段はこういう形で集約できないような議題や論点が集中したかなと

思って非常にうれしく思いました。

今日、ご報告をいただきました、山本先生、佐々木先生、木戸先生、高田先生、どうも本当にありがとうございました。コメントをお引き受けいただきました太田先生、ありがとうございました。最後になりましたが、みなさん、本当に今日は長時間ありがとうございました。これにてシンポジウムを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

